

2021. 5. 2. 主日礼拝説教
聖書：ガラテヤの信徒への手紙 5章 13-15節
『仕え合う自由』

以前いた神戸の教会の近くにわりと大きな老人ホームがありました。このホームは介護法が改悪される前までは、結構、身寄りのない人も多勢入所させてくれていました。そこは百年余り前、当時の摂津第一公会（現・神戸教会）の女性信徒さんが始められたものです。ホームで亡くなられた入所者のほとんどをわたしが葬儀をしておりました。12年間で200件を超えました。認知症や重度の寝たきりの方もおられますが、しっかりした方もたくさんおられます。親しくなるとみんな自分の歩んできた人生を話してくれます。日本という国の近代史の裏側を歩いて来られた方ばかりです。教育もろくすっぽ受けさせてもらえない。従軍慰安婦として大陸から南方へ。炭坑婦として劣悪な鉱山を転々と・・・等々。

忘れがたい方が何人かいます。そのひとりに初江さんといういつも明るい方がいました。6年前に95歳で召されました。物静かであるけれど芯がしっかりしていて、甲斐甲斐しく同室の人によく仕え、いつもにこやかで、だれからも愛される方でした。珍しくクリスチャンでした。はじめはどこのお嬢さん育ちかと思っていたのですが、そうではありませんでした。

初江さんは信州の寒村で7人兄弟の長女として生まれ9歳の時に諏訪の製紙工場に売られました。しかし3年で結核になり野麦峠をひとりで越えて帰ってくると、家には入れてもらえませんでした。納屋の藁にくるまって寒さに震えていると夜更けに母親が団子を作ってきてくれてこう言うのです。「父ちゃんが、肺病になった娘はどこにも売れねえ。無駄飯はやれねえし、皆にうつってしまう。山に捨てるしかないといって聞かねえ。お願いだからこのまま逃げとくれ」と手を合わせて泣くんだそうです。初江さんは「家族のことを思えば、どんなつらいことも喜びだった。でも仕えるものを無くしてからは、後年聖書と出会うまで、わたしは虚ろな肉の奴隷でした。」と語ってくれたのがとても印象的でした。

パウロはガラテヤの教会という課題に向き合いつつ、キリスト者の自由というテーマを捻出します。それまでは、人を召すのは神の働き、自由にするのはキリストの働きと区別していましたが、ここで初めて「自由を得るために召し出された」と一本化します。つまり、それは神の働きであり、同時にキリストの働きでもあるということです。

この神とキリストにより与えられたものが自由なのです。それは、好き勝手放題という束縛からの解き放ちなのでしょうか。わたしたちはひょっとしたら、好き勝手放題を究極の自由と思い込んでいないでしょうか。でもそれは実は束縛なのです。パウロは「この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず」、いつでもそれらから手を離すことの出来る自由が神とキリストの名によって与えられたのだと宣言するのです。

さらにその自由は抽象的・観念的真理ではなく、「愛によって互いに仕えなさい」と具体性をもって勧められます。「隣人を自分のように愛しなさい」という旧約の律法はパウロにおいて首尾一貫した事柄として結びつけられていくのです。

わたしたち教会に集う者は「互いに仕える者」として今日も招かれています。それははからずも絶望を希望へ、死を生へ、肉の奴隷を愛に根ざした奉仕の基へと招かれていることを忘れてはなりません。キリストの自由にあってこそ、わたしたちは初めて「仕え合う」自由を得たのですから